

病害虫発生予察情報(4月予報)

令和7年3月25日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均平年値)	予報の根拠
温州みかん	そうか病	発生量：やや多	3月上中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ミカンハダニ	発生量：並 (寄生葉率7.0%) ただし、東部地域：多	3月上中旬発生量：やや少 (－) ただし、東部地域：やや多 (+) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
かんきつ	かいよう病	発生量(中晩柑)：多 (中晩柑発病度(葉)0.79) 発生量(温州みかん)：多 (温州みかん発病度(葉)0.28)	3月上中旬発生量 (中晩柑)：多 (+) (温州みかん)：多 (+) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
果樹全般	果樹カメムシ類	発生量：多	昨年予察灯誘殺数：多 (+) 昨年フェロモントラップ誘殺数：多 (+) 越冬量：多 (+) 気象予報：気温：並か高い (+)
茶	カンザワハダニ	発生量：並 (摘採面寄生葉率2.6%)	3月上中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャハマキ	発生量：多 (幼虫数0.07頭/1.25m ²)	3月上中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：多 (幼虫数0.1頭/1.25m ²)	3月上中旬発生量：多 (+) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
トマト	灰色かび病	発生量：やや少	3月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少	3月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：並か高い (+) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少 (－) コナジラミ類発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (+)
	コナジラミ類	発生量：やや多	3月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (+)

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均平年値)	予報の根拠
いちご	灰色かび病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：並か高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	うどんこ病	発生量：やや多	3月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (＋)
	炭疽病	発生量：多	3月中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気温：並か高い (＋)
	アザミウマ類	発生量：やや少 ただし、中遠地域：やや多	3月中旬発生量：少 (－) ただし、中遠地域：並 (±) 気象予報：気温：並か高い (＋)
	ハダニ類	発生量：多	3月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：並か高い (＋)
	アブラムシ類	発生量：やや多 ただし、中部地域：多	3月中旬発生量：並 (±) ただし、中部地域：やや多 (＋) 気象予報：気温：並か高い (＋)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく過去 10 年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく過去 10 年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の 5 段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(－)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準
<https://www.s-boujo.jp/>

静岡県病害虫防除所 HP
が新しくな
りました。



静岡県病害虫防除所 HP
<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo/shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

2 予報の根拠と防除対策

【温州みかん】

●そうか病

予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、平均発病度は0.04（平年0.06）と平年並だった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 被害のある夏秋梢は伝染源となるため除去する。また、前年に多発した場合は伝染源を翌年に持ち越しやすいので発生に注意する。
- ・ 発芽期以降、越冬病斑から新葉へ降雨のたびに伝染する。新葉の病斑から幼果に二次伝染するため、4月（展葉期）、5月下旬（落弁直後）、6月下旬（幼果期）に薬剤防除を行う。
- ・ 苗、若木での発生が多い病害であるため、新植や改植をした場合は発生に注意する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は3.6%（平年4.1%）と平年よりやや少なかった。地域別では、東部地域で1.8%（平年1.4%）、中部地域で4.0%（平年5.9%）、中遠地域で4.9%（平年5.1%）と東部地域での発生がやや多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 着花前のこの時期は果実への実害は生じない。ただし、葉に多発すると旧葉の落下を助長することもあるため、注意する。
- ・ マシン油乳剤を散布する場合、散布直後の降雨で防除効果が低下することから、晴天が数日続くと見込まれる際に防除を実施する。

【かんきつ】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、中晩柑類の葉での平均発病度は1.36（平年0.76）と平年より多かった。温州みかんの葉での平均発病度は0.30（平年0.09）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 罹病葉のついた夏秋梢は、重要な伝染源となるので早急に除去する。
- ・ 中晩柑類では、発芽前、5月上旬及び下旬、6月中下旬（梅雨期）に薬剤防除を行う。温州みかんでも、昨年または現時点で本病の発生が見られた場合は、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、薬害が出るため発芽後～新梢伸長期は銅剤の散布を避けた方がよい。
- ・ 風ずれなどの傷口から病原菌が容易に侵入するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。

【果樹全般】

●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・令和6年8～10月の予察灯（県内4か所）における果樹カメムシ類（以下、カメムシ類）の合計誘殺数の平均は、28343頭/か所（平年2659頭、平年比10.7倍）と平年より多かった。
- ・令和6年8～10月のフェロモントラップ（県内6か所）におけるカメムシ類の合計誘殺数の平均は、2040頭/か所（平年489頭、平年比4.2倍）と平年より多かった。
- ・本年2～3月の越冬量調査（県内20地点）において、チャバネアオカメムシ越冬量/落葉1㎡は、県平均2.9頭（平年1.0頭）と平年より多かった。また、各地域における同種の越冬量/落葉1㎡は、東部地域1.6頭（平年1.3頭）、中部地域4.2頭（平年0.9頭）、西部地域2.9頭（平年1.0頭）と、特に中部及び西部地域で平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本虫の発生をやや助長する。
- ・カメムシ類の主な餌となるヒノキ球果の着果量は、隔年で豊凶を繰り返すことが多い。昨年は着果量が平年より多かったことから、本年は着果量が平年より少ないと予想される。カメムシ類の餌が不足することにより、本虫が新たな餌を求めて4～8月にかけて果樹園に大量飛来し、花・果実等を加害する恐れがある。

防除対策

- ・昨年、西日本等の果樹産地では、カメムシ類の越冬成虫が果樹園に大量飛来し、本虫の加害による落花・落果・新梢枯死等の被害が生じた。本県においても越冬成虫の飛来に細心の注意を払う。なお、静岡県病虫害防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。
- ・静岡県病虫害防除所による今後の「[病虫害発生予察情報](#)」に注意するとともに、地域の予察灯やフェロモントラップにおけるカメムシ類の発生状況を参考にし、果樹園への本虫飛来前の予防的な薬剤散布を心掛ける。また、ほ場で少数でも本虫の発生を確認したら、本虫が集合フェロモンを放出し大量飛来を招く前に、直ちに薬剤防除を行う。また、本虫の移動範囲は広いとため、地域での一斉防除が効果的である。なお、ヒノキ・スギ林の隣接地域（特に中山間地）や暴風雨後の園地では、急激に発生が増加する場合がありますので注意する。
- ・薬剤防除については、静岡県病虫害防除所による「[静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準](#)」を参照する。なお、薬剤の選択に際しては収穫前日数と総使用回数に注意する。

【茶】

<生育の概況>

茶業研究センターの報告では、品種「やぶきた」で、新芽の生育は3月15日時点で平年より2日早く推移している。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、樹冠面（摘採面）での寄生葉率0.6%（平年1.1%）、裾部での寄生葉率1.4%（平年1.5%）と平年並だった。
- ・防除員からは、平年並の回答が多かったが、一部のほ場で発生が多い報告がある。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並のため、本種の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・凍霜害等を受けた茶園では、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。
- ・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、チャハマキの越冬幼虫数は0.9頭/1.25m²（平年0.3頭/1.25m²）、チャノコカクモンハマキの越冬幼虫数は0.7頭/1.25m²（平年0.3頭/1.25m²）と両種とも平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、両種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・昨年は両種ともに1世代発生が多かったことから、秋の防除を実施しなかった茶園では越冬幼虫の密度が高い可能性がある。越冬幼虫による被害が確認された茶園では、地域の防除規制に注意して、摘採後速やかに薬剤防除を実施する。

<その他病害虫>

●褐色円星病（緑斑症）

防除対策

- ・3月上中旬の巡回調査では、平均発病葉率は9.1%（平年20.8%）と平年より少なかった。
- ・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除適期は夏期以降となるが、被害は一番茶生育期に顕著となるため、被害が大きかった茶園では、この時期に発生状況を確認しておき、夏～秋期に防除を実施する。

●マダラカサハラハムシ

防除対策

- ・近年、葉を食害される被害が発生した茶園が増加している。これらの茶園では一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがあるため、一番茶生育期に薬剤防除を行う。なお、各地区の防除規制や摘採前日数に注意する。

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率7.3%（平年10.1%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、発生をやや助長する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率4.7%（平年5.8%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、発生をやや助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 葉かび病については、抵抗性品種（*Cf-9*）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降、発生が増加する傾向があるため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。

●黄化葉巻病

予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は0.1%（平年1.7%）と平年より少なかった。
- ・ コナジラミ類の平均寄生株率は10.3%（平年9.8%）と平年並だった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させる。また黄色粘着板を設置し、本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。
- ・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

- ・コナジラミ類の平均寄生株率は10.3%（平年9.8%）と平年並だった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・今後、気温が上昇しタバココナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【いちご】

<生育の概況>

生育は平年並から遅い状況。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%（平年2.2%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。
- ・曇雨天が続く場合は、施設内が多湿となる薬液散布は避け、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.3%(平成0.8%)であり、多発していた一部ほ場を除くと発生は平成並だった。
- ・1か月予報では、気温は平成並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。
- ・多発生すると防除が困難であるため初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●炭疽病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.4%(平成1.2%)と平成よりやや多かった。ただし、例年に比べ欠株や補植が目立った。
- ・地域別では、東部地域で発生は認められず(平成1.6%)、中部地域で3.2%(平成0.8%)、中遠地域で1.0%(平成1.2%)と中部地域での発生が多かった。
- ・1か月予報では、気温は平成並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・気温の上昇に伴い病徴が再び進展するため、本ほでの新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する可能性がある。
- ・発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・発病株は培土も含めて抜き取り、ほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処理を行ってから処分する。
- ・本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にはほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、感受性低下の疑われる剤(MBC殺菌剤(FRAC:1)、DMI殺菌剤(FRAC:3)、QoI殺菌剤(FRAC:11))の散布は避ける。
- ・本病発生ほ場の栽培株は潜在感染している恐れがあるため、健全に見えても親株に使用しない。
- ・本病発生ほ場では、栽培終了後の土壌や資材の消毒を徹底する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第5号\(いちご炭疽病\)」](#)も参照する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は6.7%(平成11.8%)と平成より少なかった。地域別では、東部地域で2.0%(平成10.0%)、中部地域で9.4%(平成17.0%)、中遠地域で8.6%(平成8.6%)と中遠地域での発生は平成並だった。
- ・1か月予報では、気温は平成並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・4月以降、気温が高くなると本虫の飛び込みが増える。施設開口部には防虫ネット（目合1mm以下）を被覆し、施設外からの本虫の侵入を防ぐ。ただし、被覆により施設内の温度・湿度が高まるため、換気に注意する。
- ・花における発生状況をよく観察し、寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。
- ・天敵を利用しているほ場で薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。
- ・花はアザミウマ類の増殖源となるため、必要のない花は摘み取る。また、施設内外の雑草や花き類についても本虫の増殖源となるため、除去する。
- ・栽培終了後は、施設を密閉するとともに蒸し込み処理を10日以上行い、残存虫を死滅させる。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第6号（いちご アザミウマ類）」](#)も参照する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は22.5%（平年12.3%）と平年より多かった。地域別では、東部地域で4.4%（平年5.4%）、中部地域で31.4%（平年23.9%）、中遠地域で31.6%（平年7.7%）と中部及び中遠地域での発生が多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、気門封鎖剤や天敵を積極的に活用する。なお、気門封鎖剤は殺卵効果が低く、残効性も期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、必要に応じて天敵の追加放飼または薬剤散布を行う。薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.2%（平年2.3%）と平年並であった。地域別では、東部地域で0.2%（平年1.3%）、中部地域で5.4%（平年4.3%）、中遠地域で1.0%（平年1.4%）と中部地域での発生がやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・発生に注意し、初期防除に努める。
- ・アブラバチを利用している場合は、寄生蛹（マミー）の発生状況をよく観察し、防除の成否を確認する。薬剤散布する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択する。

【稲】

＜その他病害虫＞

●いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・「[農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準](#)」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・他県ではいもち病の QoI 剤耐性菌の発生が問題となっている（本県での発生は確認されていない）。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」

(<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>) を参照。

●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

防除対策

- ・常発地では媒介虫となるヒメトビウンカの箱施用剤による防除を徹底する。

●トビイロウンカ

防除対策

- ・本虫の日本での発生量は年によって大きく異なり、海外からの飛来時期、量、回数等に影響される。このため、本虫に効果の高い薬剤を含む育苗箱施用剤による予防防除を徹底する。なお、本虫はイミダクロプリド（アドマイヤー等）に対する感受性低下が報告されているため、本剤が含まれている育苗箱施用剤はトビイロウンカ対策に用いないよう注意する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

防除対策

- ・主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が寄主植物となることから、4月中旬に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径 300m 程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・県内全域で分布が拡大している。昨年の7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破碎する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【小麦】

<その他病害虫>

●赤かび病

防除対策

- ・ 4月に発生が少なくても、5月に多発することがあるので予防散布に努める。特に出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。
- ・ 防除適期は開花期前後となる。一回目の薬剤散布を穂揃期から5日目までに行い、さらにその5～7日後に二回目の薬剤散布を実施する。

●うどんこ病・赤さび病

- ・ 昨年5月上旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は1.0%（平年 20.2%）と平年より少なかった。また、赤さび病の平均発病株率も2.6%（平年 15.1%）と平年より少なかった。
- ・ 本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。
- ・ うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越夏した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・ 止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。
- ・ 窒素肥料の過多を避ける。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和6年3月20日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月22日から4月21日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		期間のはじめは、気温がかなり高くなる見込みです。
向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率80%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	40	40
1か月	降水量	30	40	30
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	40	30	30
3～4週目	気温	30	30	40

【予報の対象期間】

1か月	:	3月22日(土)～	4月21日(月)
1週目	:	3月22日(土)～	3月28日(金)
2週目	:	3月29日(土)～	4月4日(金)
3～4週目	:	4月5日(土)～	4月18日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
 URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>